

Contents of No.3

随想①	“自由の群像”について	大津昭浩.....	p.1
随想②	老いて詩に遊ぶ	齋藤多美江...	p.3
随想③	(この記事は非公開です)	p.5
書評	海底ケーブルの無線通信の歴史を知る3冊	大野哲弥.....	p.7
近況報告①	二つの井戸掘り	佐藤 順.....	p.8
近況報告②	新聞社を退職して思うこと	筑瀬重喜.....	p.10
特別編	フランス便り	柏倉康夫.....	p.12
編集後記		志藤聡子.....	p.17

// 随想① //

“自由の群像”について

大津昭浩

“自由の群像”は、日本における新聞人を顕彰する記念碑である。1955（昭和30）年に皇居西側の半蔵門から九段下の靖国神社に至る千鳥ヶ淵公園の一角に建立されているブロンズ製の記念像で、作者は菊池一雄（1908-1985）。東京芸術大学教授を務めていた時期の作品で、この年に亡くなった被爆者の佐々木禎子さんをモデルとした“原爆の子の像”も3年後に制作している。「新聞」を象徴する「自由」は、「言論の自由」（Freedom of the Press）であるが、群像と顕彰された新聞人からは、どのようなコンテキストが読み取れるのだろうか。

“自由の群像”の設置は、電通の周年事業の一環で行われた。1950（昭和25）年に「広告功労者顕彰」、次いで1955年に「新聞人顕彰」を行い、1971年に「放送功労者顕彰」として広告・新聞・放送に貢献した人物を顕彰している。およそ5年ごとに、その間に死亡した功労者を顕彰してきたもので、今日も継続して行われている。いずれも菊池氏がブロンズ像を制作しており、広告顕彰像として“平和の群像”（最高裁の前）、放送顕彰像として“しあわせの像”（代々木公園内）が公園敷地内などに設置、東京都に寄贈されている。

除幕式は連合軍（GHQ/SCAP）による占領が終わった3年後の11月3日午前11時から、大々的なセレモニーの下で行われた。台座と周辺の造園を設計したのは、当時東京工業大学教

授であった建築家の谷口吉郎（1904-1979）で、「自主」「自尊」「進取」の3像から成る自由の群像を長方形の池に設置し、群像の影が池の水に映えるようにレイアウトされた。シンメトリーに桜が植栽される整然とした公園計画で、建設費用は当時の金額で700万円。その後、公園に隣接して建設された千鳥ヶ淵戦没者墓園も谷口氏が設計している。

顕彰する新聞人は、「新聞人顕彰選考委員会」が選んだ。除幕式の際に、銘板に刻まれていたのは日本新聞史の草創期を経てきた人物らも含めた20名で、銘板には徳富蘇峰の撰を、緒方竹虎が書した一文が以下のように線刻された。

“新聞紙は現代人の生活必須の要器である 我国の新聞事業が日本の進運福祉に貢献したるもの極めて多大である 仍て我国の新聞事業先覚者二十名を顕彰し 茲に自由の群像を建立す 其の銓衡は現在業界の代表的人士の衆議に諮り公正審重である 是れ株式會社電通が創立五十五周年に際会し 斯界に盡さんとする微意の一である 西曆千九百五十五年昭和三十年十一月三日 蘇峰徳富猪一郎撰 緒方竹虎書”

2回目の新聞人顕彰は1960年に行われ6名が選ばれたが、その際には徳富蘇峰、緒方竹虎の両名の名前も刻まれることになる。その後の新聞人顕彰では戦時期の新聞を牽引した新聞人らが列挙されることが続く。直近の新聞人顕彰は2012年8月末に第12回目の対象者発表が行われている。前年の東日本大震災の発災を受けて1年延期されての顕彰だった。7名が氏名を刻まれ、合計101名となった。しかし、銘板にはこれ以上、名前を刻むスペースはなくなっているのだが、次回の顕彰がどのようなになるのかは定かではない。

“自由の群像”は前回の東京オリンピック（1964年）の余波を受けて移転した時期があった。現在の首都高速3号線を建設する際に皇居を取り巻く桜田濠から半蔵濠、そして千鳥ヶ淵にかけて掘削工事が行われたのだ。三宅坂から千鳥ヶ淵公園・戦没者墓園を経て竹橋に抜ける区間を地下で接続させるために、自由の群像や、周辺の桜などが1962年の春から2年間ほど清水谷公園（千代田区紀尾井町）に移動させられた。つまり群像と周辺の造園は一度、解体・移設されて、再設置されたものが現在の姿になる。ただ、新聞人の顕彰は毎回、同じ場所で行うことができた。当時から桜の名所であったのだが、その間の花見はできなかつたようだ。

（大津昭浩@神奈川）

// 随想② //

老いて詩に遊ぶ

齋藤多美江

昨年の5月、日本の近現代詩に親しむ会として『詩游会』が発足した。この会を発案なさったのは柏倉康夫先生、その案に古内都さんと齋藤多美江が賛同し、場所の確保や連絡網の利便性を考慮して、放送大学神奈川センターの学生活動グループ『放友会』の会内活動として位置づけられスタートした。初めはどれほどの人が集まって下さるか見当がつかず、3人だけでもいいからまず始めようということだったが、面倒見のいい古内さんのきめ細かい下準備のお陰で、初回から20数名の参加者を得て幸先のいいスタートとなった。

とはいってもこの話が具体化するにつけて、80歳半ばの私が今さら詩人の「詩」に時間をかけてじっくりと向き合うことに、なんの戸惑いもなかったという訳ではない。自分が文学的な詩を読まなくなって一体どれほどの年月が経ったのだろうか、詩に感動する柔らかな感情が今の自分にどれほど残っているのだろうか、といった不安が去来していたが、そんな日々の中でふっと幾つかの詩が私の口を突いて出た。

。ころがせころがせ ビール樽 赤い落日(いりひ)のなだら坂 ころがせころがせ ビール樽

。空に真っ赤な雲の色 玻璃に真っ赤な酒の色 なんでこの身が悲しかろ 空に真っ赤な雲の色

。きみとみて 一期の別れするときも ダリヤは赤し ダリヤは赤し

これらは私が小学校5年生の頃に覚えた北原白秋の詩である。昭和15年の夏私は大阪の都島第一小学校から、中国の上海第二日本小学校に転校したが、その頃女の子の間では中原淳一の挿絵が入った少女小説がよく読まれていた。6年生から女学校低学年では、吉屋信子に人気があり、教室でも吉屋信子の小説を回し読みしていて、私の所にも次々と回ってきていたが、私がまともに読んだのは『紅雀』くらいで、あとはろくに読みもしないで次の人に渡していた。何故か吉屋信子の小説に魅力を感じなかったからだ。

また当時は日に日に戦時色が濃くなって行き、本屋に新刊本が並ぶような時代ではなかった。まして上海の数少ない本屋に送られてくる日本の本はほとんどが教科書で、読み本などは期待できなかった。上海の北四川路(きたしせんろ)にある内山書店(現在も看板は残っているらしい)は小さな間口の薄暗い感じの店で、本棚には厳めしい本が並んでいたが中学生(旧制)が気軽に読めるような本はそこにも無かった。そんな中で我が家が引っ越した折に幅広い廊下の突き当りに置いた本箱には、ハードカバーの明治大正文学全集が揃っていた。私は大人の世界を覗き見するようなわくわく感をもって、それらの本をカバーから抜き取っては読んでいるうちに、巷でよく聞いていた寛一とお宮の話が立派な文学小説で、尾崎紅葉の『金色夜叉』であることを知った。私はその時「この本箱は宝の山だ」とひそかに喜んだ。北原白秋の詩集もその中に見つけ、知らぬ間に覚えていたのが先の詩である。

白秋の、ことに初期の詩にはどこかに異国情緒が漂っていて、乗りやすいリズムを持っており絵画的で、小学生にも覚えやすい詩が多かったように思う。

真っ赤な夕日に向かってまっすぐに伸びる不揃いな石畳の坂道を、大きなビール樽ががたごとと転がっていく光景は、どこかにおかしみがありロマンチックなのだが、妙に悲しい詩だと思った。

真っ赤に染まった夕焼け雲、ガラス瓶に透ける赤い酒の色は、レンガ造りの外観をもった中国の家屋にじっくり溶け込んで素敵な詩だと感じたが、私は白秋が「なんでこの身が悲しかろ」と詠んだその心にすっかり同調して、世の中には悲しいことが多いのだと分かったような気になっていた。

また「きみとみて」の詩について、白秋が隣人の人妻松下俊子との姦通罪を問われた折の詩であることを知ったのはずっと後のことで、この詩に漂うどこか危うい男女の愛の苦悩と、その日も何もなかったかのように無心に咲いているダリヤの赤との対比に心を惹かれて、いつの間にか覚えてしまったようだ。

こうしてこれらの詩は私に詩心を植え付けてくれたが、それは育たないままこの歳を迎えてしまった。その後間もなく日本は第二次世界大戦に突入、詩を鑑賞することなど子供にさえ許されることではなかった。学校では詩を口にするような人間は軟弱な精神の持ち主として排斥され、私の青春は心の中でさえ自由を謳歌することを恥じるよう仕向けられた。その後、死を覚悟の戦中引き揚げと敗戦を生き抜いて大人となり、日本復興の時代を人の親として生活と戦う私に、詩は遙か遠くの学問でしかなかったが、記憶に残る白秋の詩は私の体のどこかで、いつも心地よいリズムを刻んでいたことは確かである。

そしていま詩游会は小さな芽のまま凍結していた私の詩心をゆっくりと溶かし、この春には第八回を迎える。詩人が多くの葛藤によって到達した高い見識と、努力の積み重ねが生み出した詩を、二時間ほどの短い時間に凡人がその詩を完全解釈出来るなどは、あり得ないと私は思っているが、その詩人が思慕を通わせた身近な人や風景、そしてそこに流れていた時代背景などを柏倉先生から学び、語り合うことでその時々の詩人の真情に寄り添うことは出来る。人それぞれに描く情景は少しずつ違ってはいても、その情緒の高みにともに浸ることが出来る。それはなんとも豊かで楽しい、老いて詩に遊ぶひと時である。

(齋藤多美江@神奈川)

// 随想③ //

(この記事は非公開です)

// 書評 //

海底ケーブルの無線通信の歴史を知る3冊

大野哲弥

現在国際テレビ中継を含め、日本と海外の通信の95%以上が海底ケーブル経由である。世界を結ぶインターネットのバックボーンも光ファイバーである。ようやく海の底のケーブルにも日があたりつつある。ここ数年、海底ケーブルに関する書籍が次々刊行された。ここでは、長島要一『大北電信の若き通信士—フレデリック・コルヴィの長崎滞在記』（長崎新聞社）、有山輝雄『情報覇権と帝国日本』I II（吉川弘文館）、D. R. ヘッドリク『インヴィジブル・ウェポン—電信と情報の世界史 1851-1945』（日本経済評論社）、3冊をとりあげる。

日本の国際通信は、1871（明治4）年、デンマークの大北電信会社が敷設した長崎—上海ケーブルにより開始された。長島の著作は、明治初期に大北電信会社長崎局などで働いたコルヴィ、ブラムセンなど、3人のデンマーク人通信士の日記、エッセー、日本古代研究を紹介したものである。

ブラムセンは、余暇を日本の古代研究に使った。日本書紀で初期の天皇の在位年数が長いのは、当時の1年が春分と秋分で区切られ、2倍の年数であったからだとしている。半年で1年とすると神武天皇の崩御年齢は、127歳ではなく64歳である、という説である。

日記の主役、コルヴィは、日本最初期の写真家上野彦馬に撮影を依頼するなど日本の生活を楽しんだ。工部省の役人との交流やかれらがロイター通信社の日本の代理人を務めていたことなどが紹介されており、明治初期の生活ぶりなど、読み物としても楽しめる。

有山の著作は、幕末から昭和戦前期までの国際情報史をハード、ソフトの両面から論じた大作である。日本が大北電信会社に与えた国際通信独占権や英国による通信覇権に、日本政府がどのように対応したかとともに、ロイターなど各国の新聞社、通信社の動向が詳細に論じられている。国際通信を制度史、技術史とメディア史を両面から捉えている。日本とアジア諸国、日本と欧米諸国との力関係、折衝も浮き彫りにされる。国際情報格差や外交広報、現在のクールジャパンの在り方を考えるためなどにも有益である。

ヘッドリクの著作は、長年待たれていた”Invisible Weapon”の邦訳である。電信という科学技術が、国際政治や外交、経済の中でどのように位置づけられ、影響を与えたかを、英仏間を結び世界で最初に海底ケーブルが実用化された1851年から第2次大戦終結の1945年まで詳細に論じている。英国の海底ケーブル網に対する無線電信を活用したドイツの挑戦、第1次大戦後の米国の台頭など、通信覇権の変遷を追っている。有名なツィンメルマン電報や各国の情報・諜報活動がいかに通信と関連していたかを明らかにしていると同時に、伝送路、伝送手段獲得のために各国が凌ぎを削った状況が検討されている。安全保障と通信の問題、スノーデン事件の意義を理解するためにも目を通しておきたい。

通信は、目に見えにくいという特徴を持つが、水面下では各国、各企業で壮絶な戦いが繰り広げられている。今後の情報化社会の進展を占う意味でもこの3冊は参考になろう。

(大野哲弥@東京)

// 近況報告① //

二つの井戸掘り

佐藤 順

一つ目の「井戸」は、機関誌「研究ノート」の原稿（「破壊的イノベーション」のテーマ）の執筆である。本会 S 氏のご指摘で「破壊的イノベーション」の提唱者クリステンセンの名前を知り、『イノベーションのジレンマ』と『イノベーションへの解』を取り上げた。

そして二つ目の「井戸」は、「時代小説」の執筆である。こちらの方は明治 10 年頃の築地外国人居留地を舞台にしている。登場人物は「大森貝塚」の発見者で、ダーウインの進化論者でもあったアメリカ人生物学者エドワード・S・モース東京帝国大学教授と、「指紋研究」の先駆者イギリス人医療宣教師ヘンリー・フォールズ医師である。日本人学生の目を通して、日本滞在中の二人の外国人を描いている。「築地外国人居留地」については、本会 K 氏、O 氏から貴重な情報を頂いた。同年代に、電話を発明したアレキサンダー・グラハム・ベルもいる。ベルが電話の特許を申請したのが明治 9 年（1876 年）。ベルは 1847 年生まれで、同じ年にエジソンも生まれている。小説の資料として、ベルの伝記『孤独の克服／グラハム・ベルの生涯』（ロバート・V・ブルース著唐津一監訳）を読んだが、その中でベルの業績の評価について次のような文がある。彼の本業は「聴覚障害者の教師」であった。

【第一に、アレキサンダー・グラハム・ベルは電話を発明した。もし、それ以外になにもしなかったとしても、なにをしようと試みなかったとしても、彼はやはり歴史上最も優れた発明家のひとりとして評価されるであろう。第二に、若くして偉業を成し遂げたあと早くから創造力が衰える、というのは発明家によく見られるパターンである。偉大な発明をひとつ生み出した者はほとんど、そのほかにはそれに匹敵するものは作っていない。ところが、ある点で、エジソンは例外的であった。エジソンが自分より若い仲間たちから独創的なアイデアを引き出して、そのアイデアを商業的に実用化できるものにし、チームを組織、指導して特定の科学技術上の目標に猛攻撃をしかける、という活動を効果的に続けたことは、天才の域に達するものである。確かにこれは、有名な彼自身の定義による一パーセントのひらめきと九九パーセントの努力の賜物だったのだろう。そして、発明の独創力を絶好調の状態よりやや低めの水準に維持しつつ、エジソン自身、長年にわたって多くの成果をあげた。（中略）第三に、発明は、一八八一年以降のベルの人生の一部でしかなかった。尋ねられると彼は一貫して、自分の職業は「聴覚障害者の教師」であると答えた。】（pp365）

「発明家」を「企業」に置き換えると、第二項の最初の部分は、『イノベーションのジレンマ』の「命題」であり、「エジソン」の例は、『イノベーションへの解』そのものである。19 世紀には「解」がすでに存在していたことになる。

エジソンの名言「一パーセントのひらめきと九九パーセントの努力（汗）：Genius is one percent inspiration, 99 percent perspiration」は、日本人の多くは「一瞬のひらめき（アイデア：創発）を実現（開発）させるためには、多くの努力が必要である」と解釈して「一瞬のひらめき」を過小評価しているが、本来は別の解釈である。

浜田和幸によると「1%のひらめきがなければ 99%の努力は無駄である」（浜田和幸：Wikipedia『エジソン』の項より）。またエジソン自身は、「努力こそがひらめきに必要なものであり、努力が最も重要である」という趣旨の発言を多くしている（Wikipedia『エジソン』の項より）。「99%の努力（無駄）の上に、1%のひらめきがある」という解釈である。

昨年（2015）のノーベル賞受賞者大村智博士は、「多くの失敗の上に発見があった。失敗を恐れるな」と述べている。この場合、「努力」＝「無駄」＝「失敗」は同意語である。ここでいう「努力」は「ひらめき」を生むための努力である。これを時系列に解釈すると次の三段階に分けられる。

	第1段階	第2段階	第3段階
分配	99%	1%	99%
意味（内容）	創発（試行錯誤）	創発（ひらめき）	開発（実用化：製品化）
だれか？	多くの人	ひとり又は少数	大多数の開発従事者
エジソンの解釈	○	◎	
浜田和幸の解釈	○	◎	
日本人の解釈		○	◎

この違いはどこから来ているのだろうか。日本の場合、「ひらめき」は海外に既にあるか、海外からもたらされ、第3段階の「開発」（実用化、商品化）を行うことが多い。先行技術をキャッチアップするだけの、いわゆる「持続的イノベーション」である。自ら「ひらめき（創発）」をする必要がなく、それが「ひらめき（創発）」を過小評価する土壌になり、「研究開発はみんなでするものであり、創発（発案）者一人の成果ではない」という誤った認識をしているのである。

日本はこうした考え方を換え、個人の「ひらめき（創発）」を尊重し、それを生むために「99%の努力」を行える土壌を作る必要がある。このことが理解できないうちは、日本は永遠に一・五流の開発後進国であり、一流の開発先進国になり得ないだろう。

話をもとに戻すが、ここで二つの「井戸」は同じ水脈でつながっていることに気づいた。私は58歳のときから「小説」を書き始めた。期せずしてセルバンテスが『ドン・キホーテ』を書いたのが58歳のときである。この「文豪」にとって、今年（2016）は没400年となり、記念すべき年である。

2016年は、まさに文豪節目の年といえる。

・没400年：セルバンテス（1547-1616）、シェークスピア（1564-1616）
 ・没100年：夏目漱石（1867-1916）
 ・没20年：遠藤周作（1923-1996）、司馬遼太郎（1923-1996）

ちなみに徳川家康（1542-1616）も没400年、そして「電話」誕生（1876年～）140周年である。

（佐藤順@千葉）

// 近況報告② //

新聞社を退職して思うこと

筑瀬重喜

65歳をむかえた2015年5月に朝日新聞社を退職いたしました。1978年に入社して社会部記者、整理部編集者、ネットワーク担当記者、ネットニュース担当デスク、関連放送局の社外取締役などを経験してきました。今は関西大学で「メディア産業論」、京都学園大学で「デジタル出版論」を講義する非常勤講師をしています。

小生は新聞社に入る前から、コンピュータなどのデジタル技術とマスメディアの関係に関心を抱いてきこともあって、入社3年目に誰よりも早くパソコンを購入し、関連記事を書いてきました。そうした事情もあって、1995年に赴任した社会部で、「阪神淡路大震災取材班」のキャップや「沖縄反米闘争取材班」を担当した後、「ネットワーク担当」とされたのです。斬新な記事を書いてきたこともあって、その後ニュースサイト asahi.com のデスクに就任しました。当時驚いたのは「ニュースサイトの利用者が増えたら紙の新聞は廃止される」という論議が社内ですでにされていたことです。ニュースサイトのデスクをしつつ社内外の研究会にも参加して抱いた印象は、「新聞とニュースサイトはメディアとしての性格が違うから、両者を融合することで有力なメディアになるのではないか」でした。「新聞とニュースサイトを両用している」という学者から聞いたのは、「新聞を読む間はニュースサイトにはアクセスしない。その後に最新のニュースを知るためにニュースサイトにアクセスする」という話でした。確かに毎朝少ないアクセス数は、正午前に最高値に上がるのでした。新聞読者はその日のニュースの概要を朝刊で知り、昼になって「その朝刊記載記事を超える情報を知りたい」と願っているのではないかと考えました。

そうして抱いた印象を論文として書いたのが、「新聞+ニュースサイトは最強メディア—新聞社における戦略的融合の視座」(2002年6月、『朝日総研レポート』156号)でした。

この斬新な趣旨の論文が招いた賛成と反対の動きは強烈でした。「朝日総研レポート」の編集長や、論文を読んだ現役のデスククラスの方や、取締役から絶賛されました。論文を絶賛した取締役の方からは後になって「この論文を読んだのが私の著作を生むきっかけになった」と伝えられました。また元社長が新聞業界の国際大会でこの論文の趣旨を語ったこともありました。また、他社の新聞に似た趣旨の考えが載った記憶があります。

私の論文に異議を申し立てて来たのは、「新聞が減びてないのはデジタル技術がまだ十分に発達していないからだ。もっと発達すれば新聞は減びる」、「前世代と比べてデジタル対応力が優れた『デジタル・ネイティブ』世代が社会の主体になれば新聞は減びる」という論議でした。asahi.com を担当する取締役はこうした立場だったこともあり、幹事候補だった小生はasahi.com の仕事から外されてしまいました。

その後、小生の考えに共感するデスククラスの人々たちと「将来の紙面の対策」で論議することになり、小生の考えを中心にした報告書をまとめて東京本社に送ろうとしたところ、編集局長から拒まれて没にされてしまいました。小生だけでなく、有能な評価をされていた仲間の方も新聞の職務から外されてしまったのです。

確かに私は「自分の論文で述べたことはすべてが完全に正しい」などとは思っていません。研究会で発表したり原稿を書いたりすると、「この点に疑問」という指摘がありました。そう

した指摘は受け入れさせていただき、「そうした疑問が読者に抱かれないように筆記しよう」と考えて書き換えてきたのです。すると容認してもらえました。ただ研究会の中には、一切に何の根拠も述べることがないまま投稿を没にする編集役がいました。これは容認しようがないです。

私は新聞や放送などのマスメディアだけに関わっただけではなく出版にも関わりました。沖縄での取材をまとめた『沖縄報告 復帰後 1982 - 1996 年』(1996 年 11 月、朝日新聞社刊「朝日文庫」)と、『阪神・淡路大震災誌：1995 年兵庫県南部地震』(1996 年 2 月、朝日新聞社刊)です。いずれも共著です。さらに電子書籍の将来に関心をもっていたため、1999 年に始まった「電子書籍コンソーシアム」の実証実験に参加しました。それで電子書籍の素晴らしさと欠陥を知り、出版学会とも縁を結びました。これがきっかけで京都学園大学の「デジタル出版論」の講師になったのです。

新聞社に勤務している際は、毎日の大半は業務に捧げたので、大学の講義には十分の力を入れることができませんでした。退職後は余裕ができたこともあって、講義の準備に時間をかけることになりました。それで興味を惹かれるのが、「大学生の世代が新聞や書籍のデジタル化にどれだけの関心を抱いているか」です。レポートや答案を読ませてもらって驚くのは、「デジタル媒体を利用しているので新聞も書籍も読まない」という学生は 1 人もいなかったことです。

2014 年にデジタル・ネイティブを取り上げた著書として話題になったのが、米国でマイクロソフト研究所の研究者やニューヨーク大学の研究補助者をしているという女性研究者ダナ・ボイドの著作「It's Complicated the social lives of networked teens (複雑化しているネットワークの影響を受けた 10 代の社会的人生)」です。結論として「デジタル・ネイティブは存在しない」とされていました。

今後は小生が書いた「新聞+ニュースサイトは最強メディアー新聞社における戦略的融合の視座」の趣旨に賛同してくれる人の数が増えるのではないのでしょうか。

(筑瀬重喜@大阪)

// 特別編 //

フランス便り

柏倉康夫



情報化社会研究会の皆さま、

2015年11月30日にパリへ到着し、2日間の会議を終えて、本日12月2日の夕方にトゥールーズに参りました。9日まで滞在の予定です。

パリ到着の日は、まさにCOP21の首脳会議とぶつかりました。会議の会場となるル・ブルジェは、シャルル・ドゴール空港とパリ市内を結ぶ中間にあり、そのため空港からパリ市内への高速道路は封鎖されるために、3、4時間かかると脅かされました。たしかに高速道路A1は封鎖されていましたが、もう一本の西側を通過してパリに入る高速道路A3は通行でき、事前の封鎖予告がきいたのか、逆に交通量が極端に少なくいつもよりも早くホテルに着きました。

パリは11月13日のテロ事件のあと、いたるところ警戒が厳重で、何をすることも時間がかかります。人びとは平静は取り戻しつつありますが、多くの方が、「今回の事件は、これまでの歴史や社会構造が生み出したもので、フランスの社会がはらむ矛盾が煮詰まった結果」だと考え、「次の事件が起こる可能性は非常に高い」と感じています。

事態を複雑にしているのが、フランスがこの12月に大規模な地域選挙を迎えることです。今度の事件で右翼政党「国民戦線(FN)」のさらなる台頭が確実である一方、この状況に危機感を募らせるオランド大統領の社会党や、次の大統領選で政権奪取を狙うサルコジ前大統領の率いる保守派が打ち出す対応策が、一層ヒステリックになっています。

オランド大統領は、「これは戦争だ」として、厳戒態勢の3カ月延長を打ちだし、一次的に支持を若干取り戻しましたが、「振り上げた拳」をどのような形で降ろすのか、降ろせるのかが見通せない状況です。またお知らせします。

(12月2日夜記)



皆さま、

先のメールで書いた「フランス社会がかかえる矛盾」とは、フランスが拠って立つ基盤である「共和制」と、それを成立させるための *intégration*・同化政策が揺らいでいることです。

フランスは王権と宗教の支配から脱するために血を流した大革命をへて、18世紀末に「共和制」国家へと生まれ変わりました。このとき「自由・平等・友愛」を旗印に、宗教的権力が政治や社会、とくに教育の場に影響をあたえない制度をつくりあげました。

フランス人の多くはいまもカトリック教徒ですが、日曜日に教会へ行く信者は減っています。それでも小学校が水曜日に休校となるのは、この日は子どもたちが、教会でカトリックの「教理問答」を学ぶ日とされているからです。逆に言えば、わざわざそうした日を設けて、公教育の場に宗教を持ち込ませないように、宗教が公の生活で力を振るわない方策を取ってきました。

こうした考えは、フランスに住む多くのイスラム教徒にも等しく当てはめられ、かつてイスラム教徒の女子生徒が、頭をかくスカーフをして登校するのを禁じたのもそのためです。さらに、フランスに住む人間は、おしなべて「フランス共和国の良き市民」とするという考えのもとで「同化政策」をとり、学校でも共和国の理念に基づく教育を施してきました。

歴史的に見れば、フランスに北アフリカ（マグレブ）のイスラム教徒や、ヴェトナム、ラオスなどのアジア人が多く住むようになったのは、19世紀の植民地支配の結果です。とくに第一次大戦の際、兵士として徴用され、そのあとフランスに住みついた人たちが多く、いまはその3世、4世の世代です。フランスの人口政策が上手く行って、人口が増えているのは事実ですが、比率からするとこうした人たちの出生率が高い結果でもあります。

「同化政策」のもとになっている *intègre* という言葉は、もともと「公平な」という意味ですが、今日のフランスで、彼らが置かれている社会的、経済的環境は決して「公平」とは言えません。「見えざる」人種的偏見にさらされ、経済的格差から住む場所も大都市の中心ではなく、周辺に住まざるを得ないのが現状で、失業率の点でも格段の差があります。フランスではある地域の住民の人種的構成を調査したり、公表したりすることは禁じられています。しかし事件の舞台となったパリの北東地区にあたる 19、20 区やそれに続く郊外に、移民の人たちが多く住んでいるのは紛れもない事実です。行政は格差の解消に手は打っていますが、現状の改善どころか格差はますます広がっています。

こうしたなかで育った若者たちは、れっきとしたフランス共和国の市民でありながら、彼らの言葉によれば、「二級市民」の立場に置かれています。そこに過激派からの呼びかけがあれば、自分が生まれ育った社会にプロテストするテロ行為に走る、——これが今回の衝撃的な事件の背景です。その意味で、今年1月の雑誌社「シャルリー・エブド」襲撃事件とは動機が異なっていると、フランスの友人たちは口を揃えて言います。

解決策は？ 特効薬は見つかりません。自動小銃を手にした兵士が街中を哨戒していますが、それが問題の解決につながるには到底思えません。オランダ大統領の呼び掛けで、人びとは窓に三色旗をかかげて亡くなった人たちの悼み、その旗がいまもところどころに飾られたままになっています。一時的な愛国心の現れですが、偏狭な愛国心はさらなる偏見を生み出しかねません。

(12月3日記)



皆さま、追伸です。

パリでは、日本文化会館（*Maison de la culture du Japon*）の評議委員、日本側5名、仏側7名で、来年度の運営に関する検討会を行いました。

パリの日本文化会館は、19年前に日仏政府の肝いりで日仏交流の拠点としてつくられ、これまで大きな役割を果たしてきました。今回の会議の場でもテロ事件が一つの話題となり、理念としては、「文化交流が相互理解を促し、ひいては暴力に対する盾になるように努力しよう」という点で一致しました。しかし現実に「見えざる暴力」といかに対峙するか、これについてはさまざまな意見が出ました。追ってお話する機会があればと思います。

現実を一つご披露すれば、11月13日の事件以後、フランスを訪れた外国人の数で一番減ったのが日本人、次いでアメリカ人だそうです。日本通のフランスの友人は、「マスコミの報道の仕方が過剰なせ



いではないか」と言っております。この点中国人観光客の減少はそれほどではなく、パリの街中では相変わらず中国の方を多く見かけました。彼らは、軽機関銃をもってパトロールする兵士の姿をパチパチ写真に撮っております。

いまは正しくクリスマスを前にして、物が一番売れる季節なのですが、大手デパートは軒並み30%から50%の売上減だそうです。

(12月4日記)



皆さま、

3通目の「フランス便り」におつき合ください。

フランスに生まれ育ったイスラムの若者たちが、なぜ過激派にスカウトされるのか。こちらのTVや新聞で報じられているところでは、以下のような事情があるようです。

ご存知の通り、ムスリム（イスラム教徒）には大きく言って、二つの宗派があります。大多数はスンニ派で、サウジアラビアをはじめ、シリア、ヨルダンなど世界中におり、フランスのムスリムの多くもこのスンニ派の人たちです。もう一つのシーア派はイランに多く、シリアや他の地域にも少数おります。

二つの宗派の最大の違いは、「イマーム」とよばれる「導師」に対する考え方だとされます。シーア派の人たちにとって、「イマーム」は絶対に間違いを冒さないリーダーであって、イスラム教の祖ムハンマドが持っていた、人間として特別な資質が、血脈を通してイマームに宿ると考えられています。つまりシーア派の人たちにとっては、「イマーム」が最高の指導者です。かつて私がフランスをベースに取材していたとき、イランで「ホメイニ革命」とよばれるイスラム原理主義が生まれ、今日のイスラム教台頭の基になりましたが、あのホメイニ師はまさしくシーア派が考える最高指導者、イマームの典型です。

一方、スンニ派の人たちにとっては、ムハンマドの言動をまとめた「コーラン」こそが、信仰と実生活が拠って立つもっとも大切なもので、「イマーム・導師」は絶対の存在ではありません。スンニ派の人たちがコミュニティーをつくる場合、モスクへ礼拝に行くわけですが、そのコミュニティーの人びとが、リーダーと認める人がイマーム・導師となり、宗教生活を円滑にする役割をにないます。彼らイマームには、カトリックなどと異なり、ローマ教皇を頂点とするようなヒエラルキーはありません。したがって資格試験もないといえます。

フランスの都市やその近郊に住む、宗教を重んじるイスラム教徒（繰り返しますが殆どがスンニ派です）は、モスクに集い、コーランの教えで生活を律しています。ただカトリック国フランスでは、モスクは極端に少なく、多くのコミュニティーでは、イスラム教徒たちは普通の建物の一室を集会場にしています。カトリック教会も、教会の一部をイスラム教徒に貸すなどして、宗教上の融和をはかって来ました。

こうした環境のなかフランスで生まれ、イスラム教徒として育った若者たちは一般的には宗教心は薄く、かつアラビア語も十分に読み書きできない者が多く、「コーラン」をアラビア語で読むこともありません。それでもイスラム教は生活と密接に結びついていますから、コミュニティーの集会所には出かけます。すると、そこではどのような資格があるかも分からない「イマーム・導師」が、「コーラン」の説教をします。彼らは「コーラン」の教えを独自に解釈し、過激思想を若者に植えつける余地があるというわけです。事実多くのコミュニティーで、こう

した「にわか」イマーム・導師が潜入しているとも言われます。以上が、フランスのマスコミが解説する図式で、「われらが」オウム真理教の場合と酷似しています。

先日 TV で、カズヌーヴ内務大臣は、これからは監視を強化し、「ヒエラルキーのないイマームが行う集会に注意を払う」とともに、「もしイマームが”武器をもって戦え”といった発言をすれば、彼を逮捕し、集会所をただちに閉鎖する」と発言しておりました。フランスでは、武器をもって戦えるのは軍だけであり、一般には禁止されているというのが理由です。

以上は、フランスのマスコミが伝えている解説で、イスラム教に暗い私には真偽のほどがよくわかりませんが、参考までにお送りします。

(12月5日)



**さん、お元気ですか？

トゥールーズから車で1時間半ほどのアルビ・Albi という、画家トゥールーズ・ロートレックが生まれた街に滞在していました。6日の日曜日に行われた地域選挙の結果は、日本でも報道されているでしょうが、右翼政党の「国民戦線」が、得票率では保守党、社会党を押さえて第一党になりました。戦後70年のフランスではじめてのことです。ただ16ある選挙区（全国を16のブロックに分けています）のうち、どこも過半数を獲得した政党はありませんから、最終結果は13日日曜日の第二回投票の次第です。

これから一週間のうちに、現政権の社会党と保守党の間で選挙協力ができるかどうかは鍵です。さもなくば、戦後初めて、移民反対やEU離脱をとる極右政党の力が、政治の上で無視できなくなる事態が生じます。フランス人は自分たちの投票の結果とはいえ、固唾をのんでいます。

以下は、10月4日の「北海道新聞」の読書欄に書いた、フランスの作家ミシェル・ウエルベックの『服従』(Soumission) という本の書評です。この本は、今日の事態を先取りしていて示唆的です。

書評『服従』

フランスの近未来を想定した小説で、語り手のフランソワはパリ大学文学部で19世紀の唯美主義の作家ユイスマンスを専門にする中年の教授である。

物語の発端は2022年に行われる大統領選挙。決選投票には二人の候補、極右の「国民戦線」の党首マリーヌ・ルペンとイスラム同胞団（架空の政党）を率いるモハメッド・ベン・アッバスが残る。彼はエリート校として有名な行政学院(ENA)出身で、イスラム過激派とは異なり、これまで政権を担ってきた社会党や保守勢力は、EU離脱を主張する「国民戦線」に政権を渡さないために、イスラム同胞団の支援にまわり、ベン・アッバスが大統領に当選する。イスラム政党が政権を握ったフランスでは都市郊外の治安は改善され、アラブのオイルマネーが流入して、財政も改善される。だが一方で、社会制度は急激な変化にさらされる。生産手段の多くが国有化され、中等教育はイスラムの教えが中心のカリキュラムに変わり、女性は街中ではベールを被ることが義務づけられる。そしてフランソワが文学を講じるソルボンヌはイスラム大学となり、イスラム教徒しか教鞭をとれず、フランソワも解雇される。

フランスの読者は、この小説がイスラム教徒への恐怖をいたずらに煽るのではないかと懸念した。だが著者ウエルベックの真の狙いは、ヨーロッパを覆う政治状況を風刺するだけではなく、状況に応じて簡単に意見を変える都会人とくに知識人の生き方にある。事実フランス人は哲学的、宗教的信念からではなく、イスラム教に改宗して大学へ復職する。その大きな理由はイスラムマナーによる高い給料と、イスラム教が認める一夫多妻制にある。

本書は奇しくもイスラム教を風刺した週刊誌『シャルリー・エブド』が襲撃された日に出版され、著者には警察官の保護がつくなど評判となった。ただそんな話題をこえて、いまのヨーロッパの対イスラムの心象風景を知る上で大変参考になる。

(12月7日)



皆さま、

予定通り、12月10日に帰国しました。13日に行われたフランスの地方選挙の結果は、ご存知のように、「国民戦線 (FN)」は16の地域のどこでも第一党にはなりませんでしたが。ただ内務省の発表では、「国民戦線」の得票率は全国で27%に達し、サルコジ前大統領が率いる共和党など中道・右派勢力の41%、現政権の社会党など中道左派の29%に次いで、「国民戦線」がフランスでは第三の政党であることが明らかになりました。この結果、「国民戦線」所属の地方議員の数は、これまでより大幅に増え、もはやフランスの政治の上で無視できない勢力になりました。

6日の第一回の投票では16選挙区のうち、「国民戦線」が6つの選挙区で首位に立っていたのに、第二回投票では、いずれの選挙区でも首位に届かなかったのは、第一に、移民排斥やEU離脱を主張する政党の躍進に危機感を抱いた人びとが、投票所に足を運んで投票率が第一回よりも上がったこと、もう一つは、第二回投票を前にして、「国民戦線」の党首マリヌ・ルペンの地元であるフランス北部の選挙区や党首の姪のマリオン・シャルルルペンの地盤である南フランスで、勝ち目のない社会党が、「国民戦線」が一位になるのを阻止するために、議席を放棄して共和党候補への投票を呼びかけたためです。こうして、全国16の地域のうち7地域を共和党が、5地域を社会党が制し、残りの一つコルシカ島では、地域政党が第一党になりました。この結果は2017年に行われる大統領選挙にも影響するのは確実で、保守・社会の既成政党対「国民戦線」という構図ができあがったことになります。

フランスにおける右翼政党の台頭が、他のヨーロッパの国々へ波及することは十分予想されます。流入する移民、警戒されるテロとあいまって、ヨーロッパの情勢はますます混沌としそうです。

(12月14日記)

編集後記

新年早々、新会員もお迎えし、当会にとって幸先の良い1年のスタートとなったようです。

お陰さまで、この会報も、無事に第3号を発行することができました。

今年もどうぞよろしくお願いいたします(S@OITA)。

